

もんむす・くれすと ぱらどくすRCG

Mon-musu Crest Paradox RCG

ぱらどくすRCG



DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

天乙宮

「ルカ……おい、ルカ」

まどろみから目を覚ますと、アリスが立っていた。

「たまもが呼んでおる。いっしょに来るがよい」

「あ、ごめん。まだ書き終わってないんだ……サイン」



魔物と人が共存するようになった世。黒幕を倒し、種族間の
いさかいも消えた。

とはいえ、まだ問題は山積みだ。

僕は自分のサインをいろいろな書類に書いていた。街に作られる
新しい法律。新しい建設計画。

檜の木で作られたテーブルに並んでいる、たくさんの書類の
内容だ。



人と魔物、二つの種族を結びつけた英雄。そんな立ち位置になっている僕は、これらの書類を一枚一枚確認しながらサインをするハメになっていた。

英雄のお墨付きがあれば、ことがスムーズに運ぶ。これも魔物と人間が共存するために必要なことらしい。



「いつの間にかうとうとして寝ちゃって。もうしばらく待ってくれないかな？」

「そんなものはあとでよい。たまもが呼んでおるのは、別の件だ」

アリスは蛇腹^{じやばら}を動かしながら、スルスルと廊下へ進む。僕はあわてて追った。



「来たか」

魔王城の応接間。そこに狐の魔物、たまもが立っていた。

「イリアSPORTの東に小さな村がある。ルカ、今からそこに行けるか？」

「えっ。なにか問題でもあるのかい？」

「うむ。元は人間しかおらん村じゃが、最近、魔物たちがその村に住み着くようになってのう。それが原因で、人間たちが困っておるとのことじゃ」

「魔物を追い出そうとする派閥と、共存を望む派閥ができて、ぶつかり合っておるようだ」

アリスが話に入った。



「分かった。僕でよければすぐに行くよ」

見過ごせない問題だった。人間と魔物が争うことだけは絶対に避けなければ。

「余もついて行くぞ。魔物が争いの原因となつては、心苦しいからな」

「うん。いっしょに行こう、アリス」

人間の僕と魔王のアリス。僕たちは種族は違えど、心は一つだった。その村だって、共存できる方法があるはずだ。



僕たちは神鳥ガルダに乗って、さっそく村へと向かった。



「……ここか」

うっそうと茂る木々のあいだに村はあった。ぽつんぽつんとたたずむいくつかの家。そのありふれたたたずまいは、静かに日光にさらされていた。

「ふむ。ずいぶん田舎だな。たいしてうまいものはなさそうだ」

アリスはぼやいた。



「よし、住人を探してくわしい事情を聞こう」

「うまい名物を聞き出せればよいのだがな」

アリスは目的が変わっていた。



「人がいないね」

二人で村を歩き回る。田舎のせいか、外を歩く住人が見つからない。目の前には無人の畑が広がっていた。

「レストランに行くぞ。そこなら見つかるはずだ。うまいものが」

「いや、住人だろう」

僕たちは遠くに見える、大きな建物を目ざして歩いた。レストランでも教会でもいい。そこなら、少しは人が集まっているだろう。



「アリスがいれば安心だね」

並んで歩きながら言った。

「何がだ？」

「だって魔王の鶴の一声があれば、魔物側はまちがいなくこっちの言うことを聞くし、そうなれば人間たちも納得できるような結果に持っていけるはずだよ」

魔王が直々に調停するのだ。どんなトラブルだったとしても、まあ大丈夫だろう。



「ドアホめ。魔王の権力を持って調停したところで、解決にはならん。双方が心から納得できる結果にせねば、共存は続かんだらう。魔王からの調停など、結果として服従させる命令になってしまうのがオチだ」

「あっ、そうか」

うかつだった。魔王であるアリスといっしょにいる。そんな現実が僕を浮かれさせてしまったようだ。

「なるべく自然に解決させねばならん。余はできる限りよけいな口をはさみたくない」

「そうだね……。ごめん」



アリスは思慮^{しりょ}深く、賢明だった。そして魔物と人間の共存について、誰よりも真剣に思いを凝らしていた。

権力に驕^{おご}らず、それゆえにいつそう魔王としての威厳を感じさせる。
僕はアリスに、近寄りがたいほどの威^{おごそ}かさを感じた。



「しょうがない奴だな、貴様は」

アリスは顔をほころばせた。彼女の指が、僕の頬を優しくなでる。

「おっちょこちょいなのは、出会ったころとちっとも変わらん」

アリスは片手で僕の頭をなで回しながら、余った手で腰を抱いた。
尊厳な賢君、魔王アリスフィーズが僕だけに見せる、甘い笑顔。

「ひよっこだった貴様を思い出すな。余が鍛えなければ、満足に戦う
こともできなかった……」

「……今でも、そうだよ」



しゅんげん
峻厳な魔王かと思えば、包むように甘やかしてくるアリス。僕はそんなアリスの魅力にとろけてしまいそうになる。

「アリスがいないと、僕はダメなんだ……」

僕はアリスの胸に顔をうずめて甘えるように言った。

「そうだ。貴様は余のものなのだからな。誰の言うことにも従わなくてよい。ただ、余だけに従い、余だけを見ている」

「うん……」



アリスは僕を抱き寄せ、指に力をこめて痛いほど絞めあげた。

「貴様に選択権はない。余の所有物であり、餌だ。分かったな」

返事を返す暇も与えず、アリスは自らのくちびるを僕の口に押しつける。

まるで自分の所有物であることを確認するかのよう強引だった。



目の前でするどく輝くアリスの端整な瞳が潤み、柔らかいくちびるが僕を吸う。

「ん……ふう……」

温かい息が、僕の顔に何度もかかる。

密着したくちびるからアリスの舌が伸び、ヌルツと僕の口内に入りこんだ。

「ふむう……」

少し呼吸が苦しくなる。ねっとりとしたアリスの舌が、僕の舌の上を這い回る。



舌と舌がからみ合い、お互いの唾液が混じり合う。

アリスの長い舌がヌルヌルと口内を掻き回し、僕の舌を愛撫する。

濃密な快感が、口の中をむせ返るほどいっぱいになり、ぐらぐらと意識がブレて、一瞬、気絶しそうになってしまう。

僕はアリスのされるがままに、口内を舐め回され続けた。





Mon-musu Crest Paradox RCG

ぱらどっくすRCG

「ルカ。あそこに住人がおるぞ」

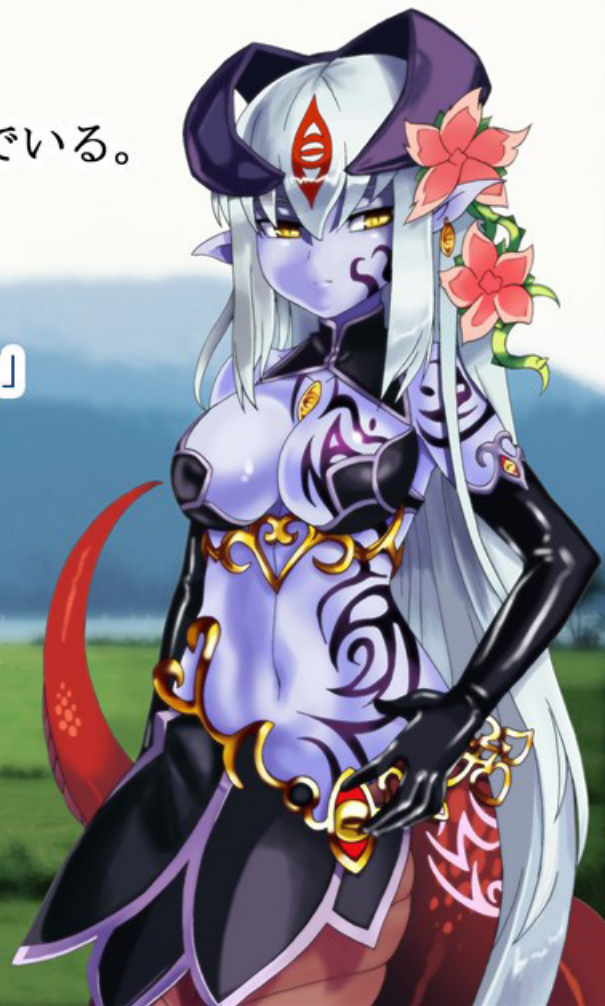
アリスが指差す先には、道を歩く少女がいた。

ぷるぷると粘液状の身体を揺らし、滑るように道を進んでいる。

住人には違いないが、どう見ても人間ではない。

「おなかすいたー。おいしそうな男の子、いないかなあ……」

粘液状の少女——スライム娘はポツリとつぶやいた。



「ほう、やはりレストランか。ルカ、貴様はそこのスライムから
事情を聞き出せ。余はあそこで聞きこみを行おう」

そう言うと、アリスは目の前のレストランに入っていった。



僕はスライム娘に近づき、村でのいさかいについて聞くことにした。

「あの、いきなりだけど聞いてもいいかな？ この村の住人たちの関係がギクシャクしてるって噂を耳にしたんだけど、本当かい？」



「そうなのよお。あたしも人間と仲良くしようって思ったのに、相手にされなくてさあ。ここの人たち、排他的で陰湿なのよお。絶対そう。糞田舎だし」

「相手にされない……？」

僕は聞き返した。

「餌になりそうな人間の男の子を捜してたんだけど、ぜんぜん見つからないのよ。村の人に聞いても、知らないの一点ばりでね……」

「それは、村に男性がいなくてことかい？」

「うん。見つからないの……」

スライム娘は力なくうなずいた。



男性が見つからない。どういふことだろうか。

「ねえ、おなかですいてしょうがないの。キミの精液、ごっくんさせてくれないかな？」

「ええっ？」

スライム娘はとつぜんのしかかってきた。粘液状の身体が僕の下半身にまとわりつき、ズボンをゆっくりとずり下げていく。

「まさか聞きたいことだけ聞いて、ハイさよならってわけじゃないよね？ 飢え死にしそうなあたしを見捨てる気？」

「そんな……見捨てるだなんて……」

「勇者様はそんな薄情なマネ、しないよねえ～」



「いただきます〜す」

彼女はあらわになった僕の性器をパクリと啜えこんだ。

「あっ！」

思わず、情けない声をあげてしまう。彼女はもごもごと口を動かし、僕の恥ずかしい棒を根本付近まで啜えこんでいった。

弾力のある粘液がぐにゅぐにゅと
蠢うごめきながら性器を呑みこみ、包みこむ
ように絞めあげてくる。

アリスとはまったく違った口内の感触。
口内の粘膜が、べったりと性器にへばり
つき、上下左右からぎゅうぎゅうと押し
つけてくる。

「あううっ」

ぽくんっ